

## 特別養護老人ホーム ケアポート板橋

利用者氏名	E.M様(81歳女性)	入所時:要介護度5
病名	低ナトリウム血症、萎縮性胃炎、利尿ホルモン分泌異常症、顔面神経痛、認知症	
利用サービス	特別養護老人ホーム(平成23年6月16日入所)	
経過	H23年6月16日入所、4階職員のチームアプローチにより適切なアセスメントや声掛けで残存機能を引き出す事に成功する。要介護度も5から3へとADLの向上にも繋がり、現在は新たな目標に向かってケアポート板橋での生活を楽しんでおられる。	

### 内 容

---

H23年1月30日に自宅にて転倒され都立O病院に入院。

その後、H23年3月28日に老人保健施設に入所。家族環境が整っておらず、在宅での生活が困難な為、H23年6月16日にケアポート板橋に入所となる。

老人保健施設では転倒の可能性がある事から、何かする際には必ずコールを押して職員を呼ぶよう対応していた様で、職員に着替え介助を頼んだり、夜間は「夜はいっぱい排尿があるから心配」とオムツを希望され、職員が全介助で交換しているなど、あらゆる場面において依存的な状態であった。

当施設入所後、居室担当今田を中心に、4階全職員でご本人の言動や行動をこまめに観察・記録し、日中から夜間の様子観察に力を入れる。5日位経ったところで観察・記録をまとめると夜間でもしっかりと尿意がある事や、自分でトイレに行きたいといった気持ちやそれを可能にする能力がある事がわかる。そこで「以前の老健では、転倒するリスクがある事により行動を制限されていたのではないか。その為に依存的になっていたのではないか。」とフロア内で考え、6月23日よりまず夜間の排泄をベット上でのオムツ交換ではなくコールを押して頂くよう声掛けし、トイレでの見守り介助を試みる。

結果、その夜間帯にオムツへの失禁はなく、「良かったですね。トイレでできると気持ちいいですよ。よく眠れますよね」とお声をかけると、ご本人も大変喜ばれる。久しぶりにトイレでの排泄が嬉しかったようで、その翌日にご本人から「介助を受けずに自分でトイレに行きたい」と要望がある。それを聞き4階で再度話し合いを行い、ご本人と相談のもと夜間転倒するリスクも考えベット脇にポータブルトイレを設置し、利用をすすめる。最初は転倒を怖がっていたE.M様も職員の励ましと、本人の自立したいという努力により開始から1週間後、ポータブルトイレの排泄も成功し、オムツなしでの生活を試みる。その後どんどん自信を付けられ、トイレの環境整備の配慮もあり、ついにはトイレ動作が自立になった。その事が更なる自信になり、着替えの自立、食事形態が極刻み食から刻み食へのアップなど、トイレ動作以外のADL向上に繋げることができた。

現在では要介護度5から3に変更となり、12月からは「自分で歩き、慣れ親しんだ池袋で買い物したいわ」との希望が聞かれ、歩行のリハビリに頑張っておられます。

老健での情報を鵜呑みにするのではなく、4階で新たにアセスメントを行い、適切なアセスメントと声掛けにより、本来持っている能力を引き出す事に成功しました。今回のケースで改めてチームの和の重要性を確認する事ができました。今後もチーム一丸となってチームケアに取り組んで行きたいと思っています。